

雨の日の山師のために

某年某月

D&G.Pownal という釣りキチ親子の編集になる The Fisherman's Bedside Book なる釣り文学のアンソロジーがある。この原著から、同じく釣りキチである開高健が選んで編集したものが「雨の日の釣師のために」という本であるが、全編これ大法螺であることは、この世界では驚くに当たらない。本当の釣師は雨の日こそ、いそいそと出掛けるものと思うが、雨の日の書齋に垂れ込めて、ああでもないこうでもないと蘊蓄を傾けつつ安楽椅子に身体を預けて釣り道具のカタログを眺めたり、チビリチビリとグラスを傾けつつ自分の大法螺話のストーリー展開にうっとりとして、アーとかウーとか唸りながら釣針などを取り出して磨いている姿は、馬鹿馬鹿しいほど滑稽であるが、これまた本人は気の毒なほど大マジメであるから、よそ目には益々気の毒千万に映るのである。

書齋で釣りの妄想に耽る釣師を“アームチェア・アングラー”というらしいが、これは山登りの世界でも事情は同じで、“アームチェア・クライマー”という人種も存在するのである。釣りでも山登りでも、一部にそういう人種が存在するのではなくて、多かれ少なかれ全員が、ある時には左様な人種に化けると言った方が正鵠を得ているのではなかろうか。

さて。

梅雨はやはり鬱陶しい。山岳雑誌などでは梅雨時のネタに困って、「雨も楽し、百低山」、「梅雨時のとっておきの私の秘峰」なぞと特集を組んだりしているが、雨の中を歩くのが楽しい筈がない。濡れて風邪を引いて肺炎をおこすか、濡れた岩場で滑って三途の川を渡るのが関の山であろうから、諸賢はやはり安楽椅子に沈み込んで、スカッチ・エン・ワラーなどを片手に、とろんとした眼付きで雨垂れのトレモロなどを子守歌に、ウム、ハハーン、ナルホドなどとノタマいつつ妄想を逞しくするのがよろしいのではあるまいか。左様な次第で、またまた見てきたような嘘をつくことに相なった。

ビッグウォール・クライミングの大法螺は吹き過ぎたくらい吹いてきたので、きっとあの世では閻魔様に舌を抜かれるであろうから、今回はちょっとウラヤマ辺りに逃げ込んで、樹々の枝から落ちる雨垂れでも静かに聴きながら形而上学的瞑想に耽ってみたい。左様、「哲学の溪^{たに}にて」などという題名にすれば、如何にもそれらしく聞こえるのではあるまいか。

某月某日、梅雨の最中。

ブナの大木の樹冠が頭上を覆う山腹を、深緑の梢から落ちる雨滴に濡れながら2時間ほどトラバースした。下草も雨でビショビショであるから、全身濡れにぞ濡れしの濡れ鼠の態で、とある沢の合流点の台地状に出た。頭上は緑の樹冠に覆われていて空は覗けないが、丁度天幕1張くらい空地に柔らかい草が生えていて、そこだけが詭えたような緑の絨毯という趣向であったから、これは天国、桃源郷とばかりにタープを張って埒を造った。どうせ天が仰げても、降って来るのは星ではなくて雨ばかりであるから、いっそ穴蔵の外は雨に煙った樹々の緑ばかりという方が風情が高いのでアヘル。

タープの下に潜り込んでも、横からの雨は自由に吹き込むから、マア“病牀六尺”にも満たない空間であるが、瞑想に耽るにはこのくらいの狭さが丁度適しているとも言える。かの千利休の茶室を見よ。タープというのは屋根としての布を一枚ぶら下げただけのシロモノで、四方は吹き抜けであるから、テントに比べてはるかに自然度が高く、山中哲仙の宿りとしては格好というべきであろう。

台地の下が深いトロになっていたのも、知人の溪流釣師から貰った手製の毛鉤を垂らしてみた。トロの底は深くえぐれていて暗く、竜神様の住処に相応しい。ここなら尺の岩魚がウヨウヨいても不思議ではない雰囲気だ。イワナやヤマメの匂いも充満していると思いたい。

定石どうり下流から猫の如き忍び足で近寄り竿を振ってみた。竿と言ってもそこら辺に生えていた小

竹に糸を括り付けただけのシロモノである。溪流に住んでいる魚は、上流から落ちて来る餌を狙って岩の陰から上流に目玉を向けて潜んでいるから、上流に人の影を落としてはならないのである。しかし、一向に当たらないゾ。??、ハハーン、これは今時の奴らが喰っているエサは毛鉤の羽虫ではなくて、肉食かも知れんナ。かって、水中の蛙やイモリを狙って樹上から垂れ下がっていた蛇をイワナが飛びついてくわえて水中に引き込んで喰ったという話を聞いたことがあった。ヨッシ、餌を替えて見ようではないか。今晚のサシミに持参したピンクサーモンの柵があったナ・・・。しかしそれでも、サッパリ魚影が走らない。餌を替えて竿を振る単純作業を繰り返している内に、いい加減アホらしくなってきた。

考えてもみ給へ、釣れないのも当然ではないか。何しろ溪流での釣りは生れて初めてのことであるのだから。それに、「雨の日の釣師のために」如き大法螺で得た俄知識で釣られるような間抜けなイワナでは、人(イワナ)生の激流の中では生き延びられないという訳であろう。釣り堀で釣った小魚が、いつの間にか蒙古の草原を流れるチョロート河で、ヘラ鹿さえも呑み込むという巨大魚イトウ(中国では哲羅魚、大紅魚)を釣った話に化け、やがて南米のパラグアイ河やパラナ河の幻の巨人エル・ドラード(黄金魚)に変身する世界である。エル・ドラードはブラジルでは「ティグレ・デ・リオ」(川の虎)と呼ばれ、アルゼンチンでは「パラナ河の虎」と呼ばれているそうだから、その大きさが分かろうというもの。

それにしても、全く当たりも無ければ、魚の影も形も見えないというのは、かって田舎でご幼少の頃には魚釣りの神童とさえ言われ、また海の近くに住み着いてからは石鯛狙いの達人とまで噂されたワタシには、些か不名誉なことではあった。池釣り、海釣り、溪流釣りという差はあるとしてもダ。余談であるが、ワタシの名誉のために言うておくが、例えば海の魚は太陽を背にして小魚を追う習性があるから、ルアーを投げる場合も太陽に向かって投げて太陽と反対側に引くのである、というくらいの知識は持っていることを表明しておきたい。

さて、魚釣りに蘊蓄を傾け過ぎた。今回の主題である「形而上学」に戻らねばならぬが、その前に沐浴齋戒をイタさねばナラヌ。雨が降ってはいたが真っ裸になってお釜に飛び込んだ。これが真夏の炎天下なら、セルベッサ(ビール)でも浮かべて曲水の宴と洒落込むのであろうが、梅雨の今時分は未だ寒い。水から上がったら、身体がブルブルと震え思わず御叱呼をチビッテしまった。

これでは齋戒にならない。住処を汚された竜神様が怒って暴れ出すやも知れぬから、ザックからお清めのお神酒を取り出して竜神様に捧げ、残りをじっくりと頂戴することにした。お供えはピンクサーモンのサシミと恒例のトンチャン(ホルモン焼)である。トンチャンは毛が残っているような汚らしい部位ほど絶品である。「葷酒不許入山門」というのは、どこで誰が間違ったのか、この邦のおおらかな土俗信仰の伝統を破壊するものであった。日本の元々の土俗神は人格神の延長で、従ってイッパイやるのも、床屋の二階に上がってナニをイタスのも大好きな性格である。神様に捧げる食を贅と言ひ、それを神様と人間と一緒に頂くのを直会と言った。当然のことながらお神酒は欠かせないし、また「歌垣」も大繁盛したであろうことは記紀の古典を繙くまでもなく天の岩戸の故事を思い出すだけで充分であろう。

イイ心持ちになって歌垣なぞの瞑想に耽っていると、ふと何やら毛物が近くに忍び込んだような気配を感じた。夜の闇に六つ、赤い目玉が光っているではないか!! ヤッヤッ、熊か!! 闇を透かしてこわごわと覗いて見れば、それはタヌキ夫婦と子供の豆狸がチョココンとこちら向きに正座しているのであった。

「これ、タヌキ、びっくりさせるない。サーモンが欲しいのか、トンチャンが欲しいのか?」。

「ナニナニ? 食べ物が欲しくてやってきたのではない、哲仙のご説教を聴きに来たのだと?」。

「左様か、よしよし。奇妙なタヌキである。では有り難い説教を聞かせてやるがナ、その前にワシャもう少しきこしめたいのじゃヨ」。

「ナニ? 『古来より希臘では饗宴のことをシンポジオンと申します。これが現在のシンポジウムの語源となりました。お話を聴きながらお酒もおつまみも頂戴したい』とな?」。

「こら、タヌキ。なるほどナルホド。お前達タヌキ夫婦は実に学のあるタヌキじゃ。では、もそっと

近う寄れ。酒肴を進ぜる。雄狸よ、言っておくがナ、八畳敷を拡げて雌狸を誘惑するでないヅ。豆狸よ、お父ツァンとおっ母サンがヘンなことをしないように、ちゃんと見張っているよ」

さて、それでは、そろそろ始めるべいか。

「狸よ、曼陀羅というものを知っているかの。曼陀羅というモノはじゃな、この世のありとあらゆるスガタとモノゴトを過去から現在、将来までに亘って、描き出した絵図のようなもんじゃ。ワシはこの前ヒマラヤに行った時にナ、カトマンズの仏具屋で所狭しと掛けてある曼陀羅図を見て来たヨ。大概はだナ、真ん中に梵語でいう Sumeru 即ち須弥山という高い山があつてじゃナ、そのほつりを七金山という山が囲んでいる趣向になつておる。須弥山と七金山との間には七海という七つの内海があり、七金山の外側を鹹海(かんかい)という外海が囲んでいる。この鹹海には四大州が浮かんでいるのだ。その外側はどうなつているのかつて? そこは断崖絶壁になつていて、これを鉄围山というのだよ。この迷路のような絵図の隙間隙間に、神サマ、にんげん、男類、女類、ケモノ、虫ケラ、亡者、亡霊、怨霊、バケモノなどなど、あらゆる生き物の暮らし振りが描いてある」。



「ナニナニ? その須弥山とやらいう山は、おいらがネグラにしている、この上のウラヤマより高いかい? つか?」

「ナア、タヌキ、お前らは人間をだまくらかす術を持っているらしいがノ、今晚は逆に人間さまに騙されてびっくりして腰を抜かすなよ。この山はじゃ、水を出ること八万由旬、水に入ることも八万由旬、横に拡がることも同じく八万由旬と言われておるナ。由旬とはじゃな、梵語 yojana の音訳で踰繕那とも言うがな、人サマが想像できる一番長い距離を百万乗して更にまたそれを百万乗した長さだということから、これを発明した印度人はやっぱり巨人じゃな。その須弥山の天辺は帝釈天の居になつておるそうじゃ。わが邦では妙高山・妙光山ともいうのだから、きっとお前達の眷属にも其処に住んでいる奴がおるのではないか」。

「へへへ? おら達が住んでいる土地はそんなには広くないヨつか? 左様左様、流石、学のある狸じゃの。日本人はダナ、俗にいうマイナーチェンジに長けているからサ、この印度から伝わった曼陀羅を

ば、規模を縮めてわが邦に合うように作り替えた訳サ。即ちじゃ、真ん中に葦原ノ中ツ国というのを配置し、東には常世という明生の世界を、また西には妣(ハハ)ノ国という暗死の世界を置いたのだナ。葦原ノ中ツ国とは今の和、常世というのは伊勢の方角、妣ノ国というのは出雲の辺りじゃ。天上には高天ヶ原、地下は黄泉ノ国という寸法じゃ。この手の曼陀羅図はナニじゃナ、俗に言う山越しの阿弥陀来迎図の系統に発展し、折口信夫という偉い民俗学者の「死者の書」なる書物を産むきっかけともなったがナ。もう一つの系統は山伏によって我田引水されて所謂山嶽曼陀羅図というものになったのだナ。お前達タヌキ族は山々を駆け巡っているだろうから、越中の国は立山曼陀羅図というのを見たことはないか?」

(豆ダ)「アア、あの山の天辺の血の池で女の亡者が裸で泳がされたり、大法螺吹きで亡者がエンマ様に舌を抜かれたり、前世でウォンナを泣かせたイロ男がオチンチンを引き抜かれたりしているあの絵かい? お父ツァンが絵本を買ってくれたよ」

「左様じゃ、これはナ、立山で修行していた山伏共が俗人をだまくらかせて、地獄の恐怖心を植えつけ、御布施を弾めば極楽にも案内してやるヨと唆して、今でいうパックスツアーに連れ出すためのパンフレットだったのだヨ。もっと後世には越中富山の薬売りがこれを販促ツールとしても使ったがナ。」

「アア、喉が乾いてきたワイ。ちょっと休憩じゃ。セルベッサでも呑みたいゾ。オイ豆ダ、その淵にセルベッサが冷やしてあるから、ちょっと持って来てくれぬか。ヨシヨシ、お父ツァン狸にも飲ませて進ぜる。グイッ、グイッ・・・ゴックッ〜!!・・・セルベッサは何杯呑んでも美味しいのオ」

「オット、イケナイ。さてさて今宵は何の話をしておったかの? ナニ? 曼陀羅か? そうじゃったの、立山曼陀羅図まで話したのだったナ。今日のおハナシは曼陀羅図は曼陀羅図でも、立山曼陀羅の下端っこに描かれている「布橋 女人 大灌頂」というものじゃ。布橋というのは、立山山麓の芦峯寺という村の外れの三途の川という深い谷に今も架かっている橋だから、お前達も通ったことがあるかも知れんな。ナニ?、豆ダ、灌頂とは「カンチョウ!!」と叫んで他人の尻の穴に指を突っ込む仕種の遊びのことか? お前は未だ子供だから知らないのも無理もないがナ、灌頂とは「カンジャウ」と読み、昔印度の王様が即位する時、頭上に四海の水を注いだ故事から、密教の方で阿闍梨から法を受けることをいうのだゾ」。

(豆ダ)「へエ〜、お父ツァンは毎晩お母ッサンに「カンチョウ!!」とやっているけど、これは有り難い法を授けているのかい? ポンポコポン・・・」

「豆ダよ、お前は頭が良いなア〜。将来大物学者タヌキになるぞヨ。その通りだがナ。それで、ナニかい? お母ッサンは毎晩泣くのかい?」

(メス狸)「これ、タヌ五郎、変なことを人さまに話すんじゃあないヨッ!!」

「マアママ、雌ダよ、ニンゲンの世界も同じだわナ。お台場という東京のド真ん中に超高層高級億ションが出来てノ、IT 商売やらファッション界やらゲイノウ人やらという若い金持ち夫婦や恋人が何千人と入居しとるそうじゃがノ、毎夜毎夜下界がネオンの海になる頃になるとヨ、窓という窓からウォンナの泣き声の大合唱が聞こえて来るそうナ。アッ、イケネエ、その姿形を想像しとるうちにコーフンしてきたワイ・・・」

「そのハナシは後で続きを聞かせてやるとして、どこまでいったかの? おおそうじゃ、カンチョウからハナシが横道に逸れたのじゃったナ。それでじゃ、この布橋灌頂というのはだナ、宗教学者センセイによるとだナ、大凡以下のような説が定説になっておる。

立山曼陀羅図の右下は、太鼓橋の上に白布が敷いてあって、下の川で何やら亡者のようなモノがウジャウジャ泳いでいるのを橋の上に並んだ坊主共が見ておる図柄じゃ。その上の方には筋骨逞しい赤鬼共が禪姿で、血の池で泳がされている血盆経の女亡霊を好色そうな目付きで眺めており、もっと上には山伏らしき男が岩角に座って、赤鬼や青鬼に火の車で追いかけている衆生を見ている姿も描かれている。更に上の方を見ると峨々たる岩山の山巔には五色の雲がたゆとうて、天女が舞い阿弥陀様がお迎え

に来ているという趣向じゃ。

ナア、タヌキよ。にんげんの世界では女人禁制と言うてナ、禪定は女には許されていなかったのじゃ。お前らタヌキ界でもそうか？ それである時ナントカいう坊さんが、これでは女族が可哀相だからと、年に一回だけ秋の彼岸に麓のそれらしき舞台装置がある場所で、女だけのための疑似禪定を創ったのだヨ。この坊さんは余程女に悪さをしたので、その罪滅ぼしであったのだろうナ。

布橋というのは、今でも木の橋が復元されているがナ、川のこちら側には奪衣婆という女の衣服を剥ぎ取るのが役目の女亡者が住んでいる姥堂という怪しい堂宇があつてナ、向こう側には草深い墓地があるのじゃ。遙か頭上には立山連峰の霊峰が雲中に見え隠れしている場所だから、舞台装置としては充分だワイな。

ナニ？、女人灌頂とは一体何をイタスのかつてか？ おおそうじゃった、それが肝腎の今宵の説教だったナ。それでだ、ここからは宗教学者センセイの御説であるが、女人がこの白い布を敷きつめた布橋、つまり三途の川じゃな、これを渡ってあの世に行き一旦死んだことにして、十念というありがたいモノを授かって生き返り、再び此岸に帰って来れば来世では大往生ができるという代物だ。学者センセイはこれを「擬死再生儀礼」と名付けているがナ。平たく言えばじゃ、一度死んだことにすればじゃ、生まれ変わって現世も幸福、来世も安穩という歌い文句じゃ。

当時の女人には、これが大評判だったとみえて、沢山の希望者が諸国から殺到し大競争になったと古文書には書かれておる。値も吊り上げられて、一番に灌頂をイタして貰うしきたりの加賀の殿様の大奥ノ局は百両、次ぎに渡るどこやらの殿様の姫君は七十両、その次のさる豪商の妾は五十両、その後には蟻の行列の如く死装束で続く一般ピープルでも十両の値であったというから、マア相当の大金だわナ。今の価値に直すと大会社の重役の1年以上の給料だ。

マア、ここまでが従来の定説であったのだがナ、我が輩が精緻な実証的研究をした結果、この説は本質的に大間違いのガセネタ大天麩羅であるということが判明したノダ。宗教学者センセイはさっぱりウオンナというモノの本質が分かっておらんのじゃノウ。拙僧の文献学的、歴史科学的、文化人類的な実証によるとだナ、「十念を授かる」なぞという小難しい言葉を使ってはいるが、ナニ、これは平たく言えば、アチラの方面の大往生のことなのダ。ナニ？ よく分からんとナ？ そうだったな、豆ダは未だ子供であるからナ。左様、お前のお母ッサンが毎晩出しているヨガリ声のことだワイ。

風俗歴史学の教えるところによるとじゃ、太古の日本人はソノ方面ではおおらかな饗宴を楽しんでいたのじゃがナ、武士の世の中になって儒教とかいうモノが出てきて、女人にはソノ方面の楽しみが無くなってしまったのじゃ。よって、この布橋大灌頂というお祭りは、年に一回だけの魔女パーティーであったという訳じゃ。筋肉隆々腕っぷしが強く、アチラも抜群の鬼のような山伏にイタされると、それはもうワチキは死ニンス、ワチキは死ニンスであったことじゃろうノウ。また、山伏の方でも誰に遠慮気兼ねなく、十二単の宮居の女性(によしょう)からポッチャリ出尻の庶民の女房まで、イタシ放題、ヤリ放題。マア、お互いに利害が一致したという訳じゃ。これを仏教の方では仏悦、喜悦といふナ」

(タヌキ夫婦)「イヤ～、今宵はご上人さま、ハア、テエヘン結構な仏話を有り難うござえました。早速家にけえって、十念とかいうものをやってみますダ。ポンポコ、ポンポコ・・・」

段々と酔いが廻ってぐっすりと寝込んでしまった。朝方どうも背中がビチョビチョする。ヘンな臭いもするし、何やら全身がむず痒くて目が覚めた。ヤッヤッ、これはどうしたことだッ、清冽な河岸段丘の緑の絨毯に寝ていた筈ではないか？

ギャッ!! これはタヌキの奴に騙された!! 実は山畑の奥の肥溜めから流れ出ている溝の中に寝ていたのであります。むず痒いのはウジャウジャと蛭に喰らいつかれているのであります。



(立山曼荼羅図 最下段に布橋と布橋灌頂が描かれている)

[「夢幻の山旅 私の机上登山」目次へ戻る](#)